

丹後郷土資料館調査だより

平成 28 年 3 月 25 日 第 5 号

ごあいさつ

丹後郷土資料館は、昭和 45 年 11 月の開館以来、京都府北部における古代から近代の歴史・考古・民俗資料などの調査、研究・保存、展示に取り組み、地域に根ざした資料館として、皆様方に支えられながら歩んでまいりました。

平成 27 年度は、4 月 1 日に常設展の内容を一新し、リフレッシュオープンいたしました。また、海の京都の拠点施設として、企画展や特別展など様々な事業を展開し、丹後の歴史と文化の発信に努めてまいりました。

さらに、今年、当館所蔵の明治期から昭和初期にかけて丹後地域の沿岸部で行われてきた漁撈に関する資料 888 点が「丹後半島の漁撈用具」として国の登録有形民俗文化財として登録されました。

今後も、地域に根ざした資料館、誰もが訪れたくなる資料館、また、将来を担う子どもたちのふるさとの歴史と文化に対する愛着と誇りを醸成する教育機関として、魅力ある展示や事業を一層推進してまいりますので、当資料館への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

京都府立丹後郷土資料館長 山岸 浩

目 次

■ ごあいさつ	館長 山岸 浩	1
■ 丹後の中世国産陶磁器	森島康雄	2
■ 口上林の胸縄式負子について	横出洋二	8
■ 由良加藤家文書「恵比寿講帳面」	吉野健一	1 4
■ 平成 27 年度の資料整理	資料課	2 0
■ 丹後学び舎セミナー活動報告	資料課	2 2
■ 平成 27 年度のあゆみ	総務課	2 4

丹後の中世国産陶磁器

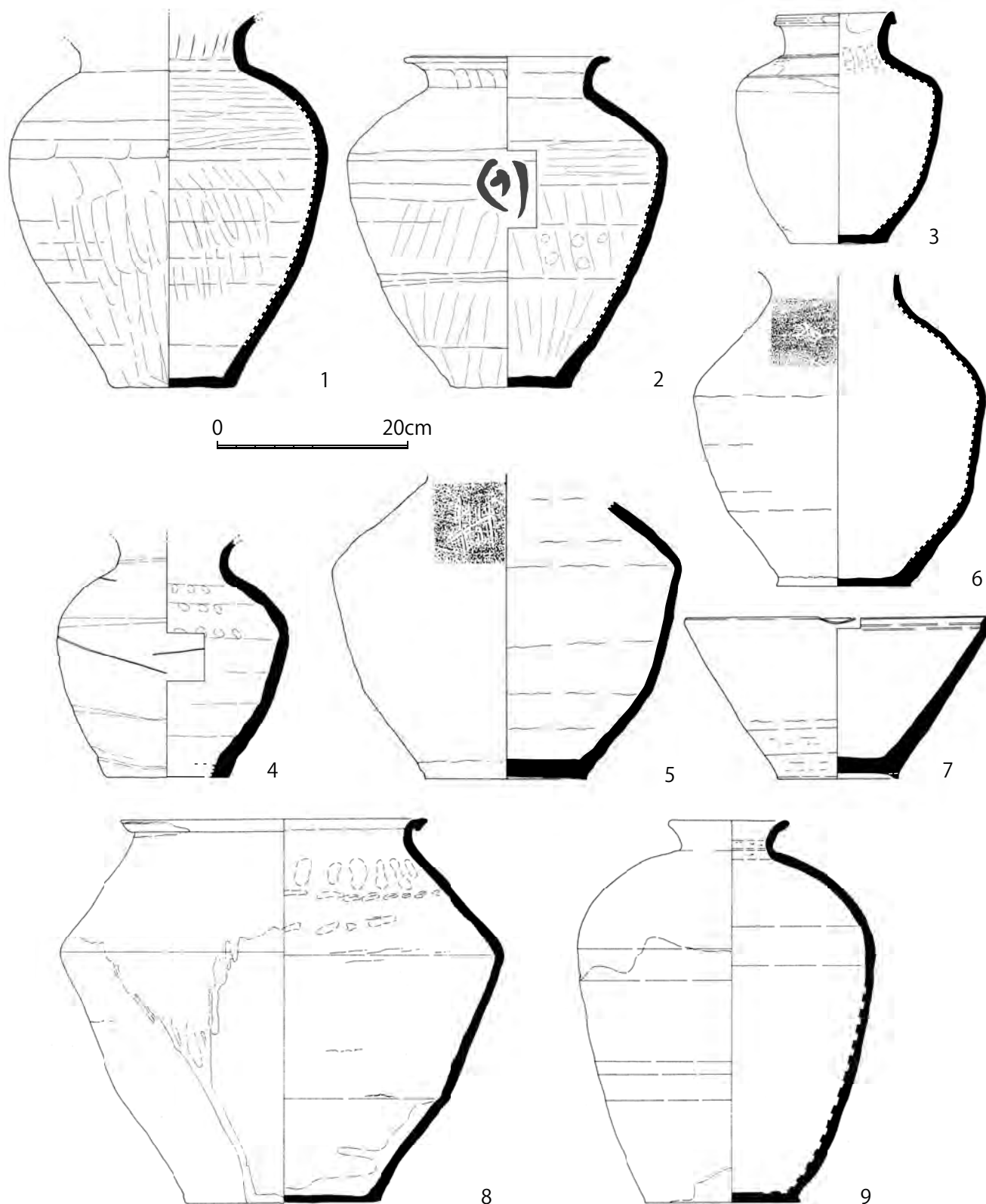
～館収蔵資料から～

資料課 森島康雄

はじめに

当館には、丹後地域の中世墓や経塚から出土し

た中世陶磁器の壺甕類の優品が多数寄託されている。これらの多くについては、すでに報告書〔杉原1980・1981〕や町史〔加悦町役場2007〕で紹介されているが、本稿では、近年の陶磁器研究の成果を踏まえて丹後地域の中世陶磁史という視点で全体を俯瞰して紹介したい。



館収蔵の国産中世陶器実測図 (S=1/6) (資料番号は写真・本文と共通)

1 常滑焼

丹後地域に中世陶磁器が現れるのは12世紀後半である。それは、京丹後市大宮町善王寺の阿婆田古墓出土の常滑焼広口壺や与謝野町男山の塚ヶ谷経塚出土の常滑焼広口壺にみられるような常滑窯の製品であった。与謝野町福井遺跡にも13世紀の常滑焼の製品がみられる。

1は阿婆田古墓出土の常滑焼広口壺である。昭和53年(1978)、京丹後市大宮町善王寺で農道拡張工事中に発見された。発見者からの聞き取りによると、発見場所の近くには五輪塔があり、壺の内部には火葬骨がいっぱい入っていたとのことであるから、共同墓地の五輪塔の下に納骨壺として埋められていたものと考えられる。

資料は、肩の張らない丸みを持った胴部から頸部が直立して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は打ち欠かれて失われている。器表面は淡茶褐色を呈し、肩部と口縁部内面には淡緑色～濃緑色の自然釉が掛かる。

底部外縁付近の接地部分が滑らかになっていることから、納骨壺に転用される前に相当期間使用されていたものと考えられる。

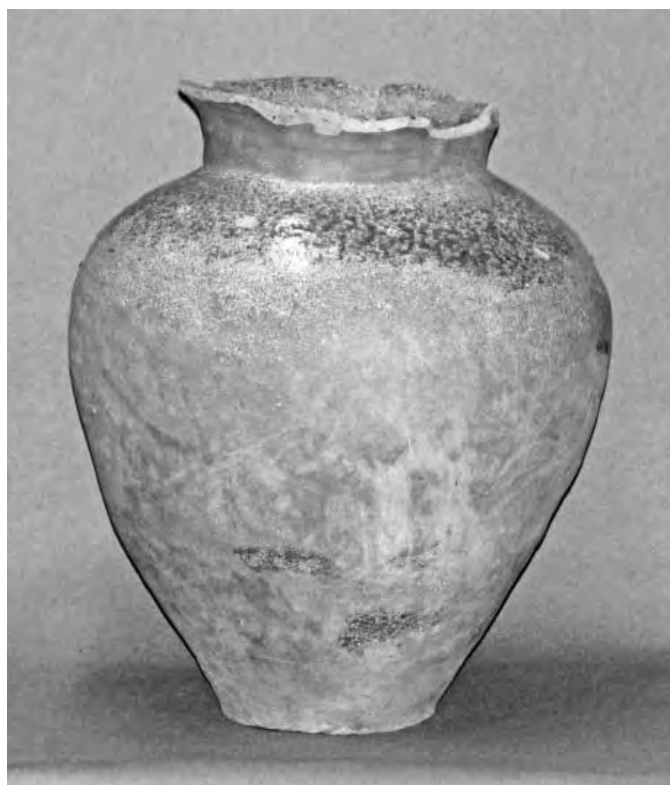
常滑焼編年〔愛知県2012〕の2型式期、12世

紀第3四半期の製品かとみられるが、倒卵形の胴部から頸部が直立する器形は1b型式期の甕などにみられる特徴で、やや古いものかもしれない。

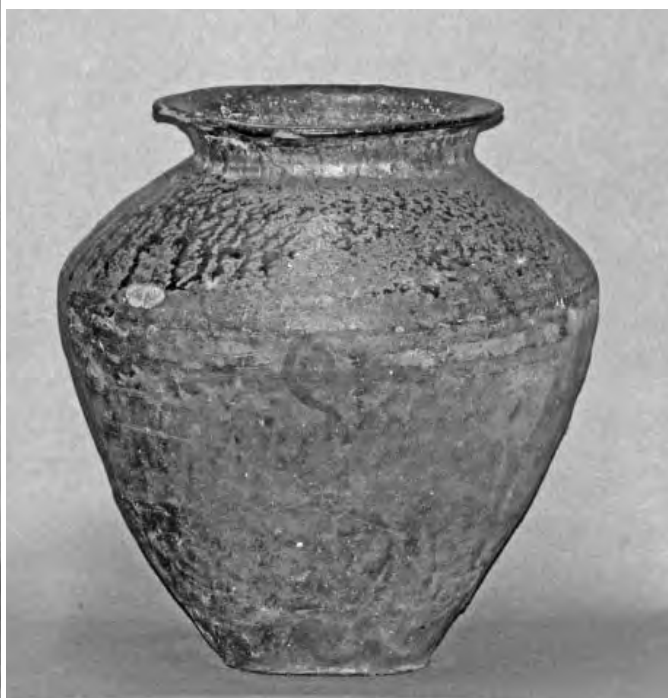
2は塚ヶ谷経塚出土の常滑焼広口壺である。与謝の海支援学校の北約200mの尾根頂部に立地する塚ヶ谷4号墳の墳頂部に設けられた経塚から明治43年(1910)に出土した。発見者からの聞き取りによると、墳頂部から約1.8mの深さの穴の底に平らな石を据え、その上に銅経筒と銅鏡を納めて、この壺を倒立させて蓋としていた。



塚ヶ谷経塚出土常滑焼広口壺（2）の墨書



阿婆田古墓出土常滑焼広口壺（1）



塚ヶ谷経塚出土常滑焼広口壺（2）

資料は、やや肩の張る胴部に短い頸部と外反する口縁部を持つ。口縁端部上面には1条の凹線が巡らされる。最大径付近に梵字のような墨書がみられるが、解読できない。器表面は茶褐色を呈し、胴部最大径より上部と口縁部内面には濃緑色の自然釉が掛かる。常滑焼編年の2型式期の典型的な優品である。

善王寺古墓の資料と同様に、底部は滑らかになっていることから、経筒外容器に転用される前に相当期間使用されていたものと考えられる。

3は福井遺跡出土の常滑焼玉縁壺である。福井遺跡は、与謝野町後野福井に所在する中世墓地遺跡である。東に向けて開く谷の斜面を階段状に造成して石塔や石仏を並べている。地蔵山遺跡とともに中世の墓地景観を今に残す貴重な遺跡である。昭和41～43年に加悦谷高校郷土研究部によって発掘調査が行われた際に、多数の遺物が出土した。

資料は、胴部下半と肩部の2か所でやや屈曲する器形である。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外反し、折り返された端部が頸部に付いて玉縁状を呈する。頸部の立ち上がり部分からやや下がったところと胴部最大径のやや上にそれぞれ1条の沈線を巡らせる。器表面は茶赤色を呈し、

胴部上半と口縁部内面には淡緑色～濃緑色の自然釉が掛かる。この資料は、以前は丹波焼、もしくは越前焼とされてきた[杉原1980]が、胎土・器形・焼成などから常滑焼とみるのが妥当であると思われる。常滑焼編年の6a型式期、13世紀第3四半期の製品と考えられるが、胴部下半と肩部の2か所でやや屈曲することや、肥厚した口縁端外面がナデによって拡がり、凹線状を呈する部分があることはやや新しい要素とみられる。

2 越前焼

越前窯の製品は、鎌倉時代になるとみられるようになる。当館には、地蔵山遺跡・福井遺跡や大安寺古墓などの中世墓出土品が寄託されている。

4は地蔵山遺跡で土師器筒形容器と並んで出土した越前焼広口壺である。地蔵山遺跡は、与謝野町幾地井根谷に所在する中世墓地遺跡で、岩屋川右岸の尾根先端を階段状に造成して形成された墓域には、石塔や石仏を並べる区画や、火葬骨を埋納した小土坑が連なる区画、塚墓などの多様な墓の存在が判明している。中世の墓地景観を今に残す遺跡として貴重な存在で、京都府指定史跡となっている。

資料は、なで肩の胴部から滑らかな曲線で続く



福井遺跡出土常滑焼玉縁壺（3）



地蔵山遺跡出土越前焼広口壺（4）

頸部が緩やかに外反する。口縁端部は打ち欠かれたために失われている。頸部の立ち上がり部分からやや下がったところと胴部最大径のやや下にそれぞれ 1 条の沈線がみられるが、いずれも全周しない。淡緑色の自然釉が薄く掛かり、胴部下半にも流れている。器表面は茶褐色を呈するが、薄い自然釉が剥離した部分は淡灰色を呈する。越前焼編年〔田中・木村2003、木村2008〕のⅡ－1期、13世紀前半頃の製品と考えられる。

5 は地蔵山遺跡出土の越前焼甕である。胴部下半と肩部の 2 か所で屈曲するやや直線的な器形で、頸部も屈曲して立ち上がるが、口縁部は打ち

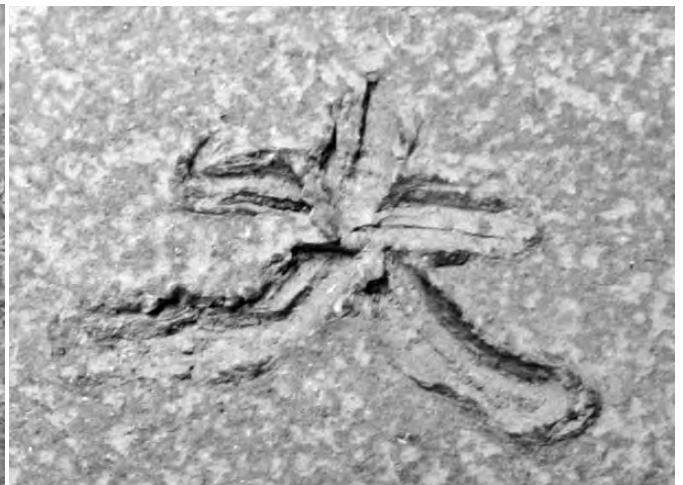
欠かれたために失われている。肩部に縦 4 条の平行するへう描きと、これらを斜めに切る 1 条のへう描きを組み合わせたへう記号が刻まれている。器表面は茶褐色だが、胴部最大径よりも上側は淡緑色～濃緑色を呈する自然釉が掛かり、一部は下半に垂れている。越前焼編年のⅢ－1期、13世紀末～14世紀前葉頃の製品と考えられる。

6 は大安寺古墓出土の越前焼壺である。大安寺古墓は、福知山市大江町北有路大安寺に所在する中世墓地遺跡である。由良川左岸の丘陵端部で昭和52年に植樹作業中に偶然発見された。

資料は、胴部下半と肩部の 2 か所でやや屈曲す



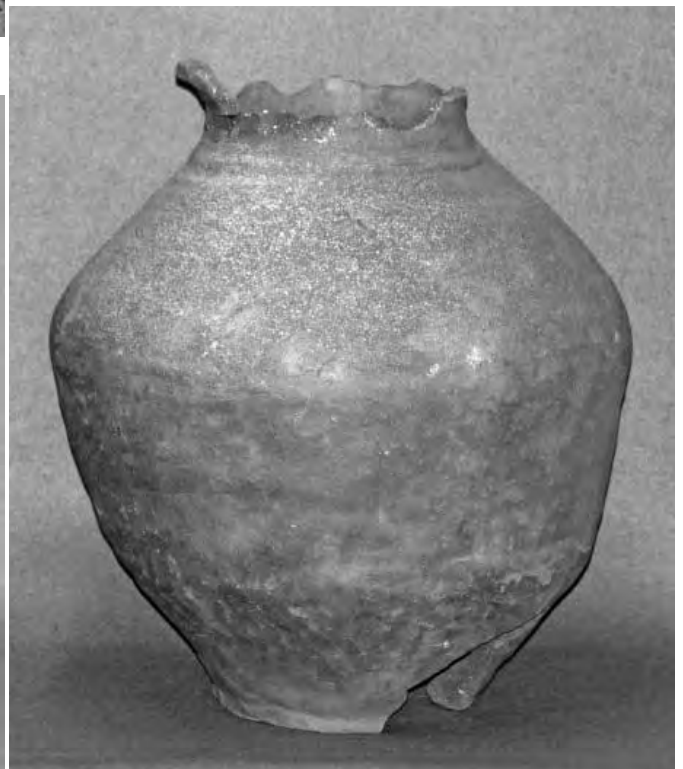
地蔵山遺跡出土越前焼甕（5）の線刻



大安寺古墓出土越前焼壺（6）の線刻



地蔵山遺跡出土越前焼甕（5）



大安寺古墓出土越前焼壺（6）

るやや直線的な器形で、頸部は緩やかに外反して口縁部に続く。口縁端部は打ち欠かれたために失われている。頸部近くに「大」とヘラ描きが施される。色調は黄茶褐色を呈する。越前焼編年のⅢ－1期、13世紀末～14世紀前葉の製品である。

7は大安寺古墓出土の越前焼播鉢である。低い高台の貼り付けられた底部から体部は直線的に開く。口縁部は内側にやや肥厚し、内傾する口縁端面には沈線の名残りと思われる段を巡らせる。口縁内面の肥厚した部分の下面にも2条の沈線を巡らせる。すり目は無いが、使い込まれて内面は口縁部付近を除いて極めて平滑になっている。体部外面の下部1/3には回転ヘラケズリを施す。色調は暗茶褐色を呈する。すり目が無いことと退化し

た高台を貼り付けることは、越前焼編年のⅢ－1期の特徴であるが、端面に沈線を巡らせる口縁部はⅢ－3期の特徴であり、編年的位置付けが難しい資料であるが、14世紀代の製品とみて良いであろう。このように編年的位置付けの難しい個体が存在することは、有高台から無高台へ単一の型式組列で変遷するのではない可能性を示しているのではないだろうか。さらなる編年の整備が待たれるところである。

3 丹波焼

丹波焼の製品は室町時代になるとみられるようになる。8は福井遺跡出土の丹波焼甕である。胴部下半と肩部で屈曲する直線的な器形で、大きく張った肩部から続く直線的な胴部上半から頸部が短く立ち上がる。外折する口縁部は端部を上下に拡張させる。口縁端部上面に2条の凹線を巡らせる。肩部には灰緑色を呈する胡麻状の自然釉が掛かり、火表側の一部は自然釉が底部まで垂れている。丹波焼編年〔長谷川2005〕のⅣ期、14世紀中葉～後葉の製品である。



大安寺古墓出土越前焼播鉢（7）



福井遺跡出土丹波焼甕（8）



福井遺跡出土丹波焼壺（9）

9は福井遺跡出土の丹波焼壺である。長胴の体部に短く外反する口頸部を持つ。口縁端部は丸く納める。良く焼き締められて光沢をもち、胴部上半には濃緑色の自然釉が掛かる。丹波焼編年のⅣ期、14世紀中葉～後葉の製品である。

おわりに

館蔵の中世陶器を産地ごとに見ると、常滑焼は12世紀後半から13世紀第3四半期、越前焼は13世紀前半から14世紀、丹波焼は14世紀中葉から後葉の製品がみられる。

常滑焼がみられるようになる常滑焼編年の2型式期(12世紀第3四半期)は、常滑市域を中心に窯の数が急増する時期で、常滑製品の生産量の増加に伴って、全国的に常滑窯製品が分布するようになる時期である。このような時代背景の中で丹後にもたらされた常滑焼が、経筒外容器や納骨壺に転用されたものと考えられる。

越前焼がみられるようになる越前焼編年のⅡ期(1190～1290年)は、越前焼の窯が熊谷支群に移って生産を拡大する時期で、製品は加賀南西部から出雲までの日本海側に分布圏を広げることから、越前焼は日本海水運によって運ばれたものと考えられている[田中2010]。京都府南部をはじめ多くの地域では鎌倉時代末(14世紀前葉)まで中世陶器の大半を常滑焼が占めるのであるが、これら日本海側の地域は、常滑焼に比べて生産地からの距離が短いという利点を生かして越前焼が分布を広げたものと考えられる。こうした流れの中で、丹後にもこの時期から越前焼が分布するようになり、京丹後市久美浜町山の神1号経塚出土のⅡ期の甕[丹後郷土資料館1977]、宮津市エノク経塚出土のⅡ-2期の三耳壺[岩松2001]、伝由良川河口出土のⅢ-1期の「嘉元四年」銘の甕[丹後郷土資料館1977]など、類例は比較的多い。

丹波焼がみられるようになる丹波焼編年のⅣ期(14世紀中葉～後葉)は、丹波焼が東海地方の瓷器系陶器窯や東播系須恵器窯からの影響を脱して独自性を現す時期で、窯の数も増加する。これを背景に、越前焼よりもさらに生産地の近い丹波焼が越前焼に代わって分布するようになるものと思

われる。

このように、当館収蔵資料で見ると、丹後地域で出土する主な中世国産陶器は、12世紀代は常滑焼、13世紀に入ると越前焼、14世紀中葉から後葉は丹波焼と変遷することが予想される。資料館に収蔵されている資料は経塚や古墓出土の完形品もしくは完形に近い製品ばかりであるから、他の遺跡出土の破片資料も含めた検討を行って、より詳細な傾向を明らかにしたいと考えている。

参考文献

- 愛知県 2012『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系
岩松保 2001 「鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第98冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
梅原末治 1923 「男山塚ヶ谷ノ経塚」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第5冊 京都府)
木村孝一郎 2008「越前焼の編年的研究ノート」(『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会)
京都府立丹後郷土資料館 1977『経塚 丹後とその周辺』
杉原和雄 1980 「福井遺跡出土の遺物について」(『金屋比丘尼城遺跡発掘調査報告書』京都府加悦町教育委員会)
杉原和雄 1981 「京都府北部出土の土師製簡形容器とその伴出品」(『史想』第19号 京都教育大学考古学研究会)
田中照久 2010 「越前焼」(特別展『古陶の譜』中世のやきもの一六古窯とその周辺— MIHO MUSEUMほか)
田中照久・木村孝一郎 2005「越前」(『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』)
中野晴久 2013『中世常滑窯の研究』
長谷川眞 2005「丹波」(『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』)
与謝野町役場 2007『加悦町史』資料編第1巻

口上林の胸縄式負子について

資料課 横出洋二

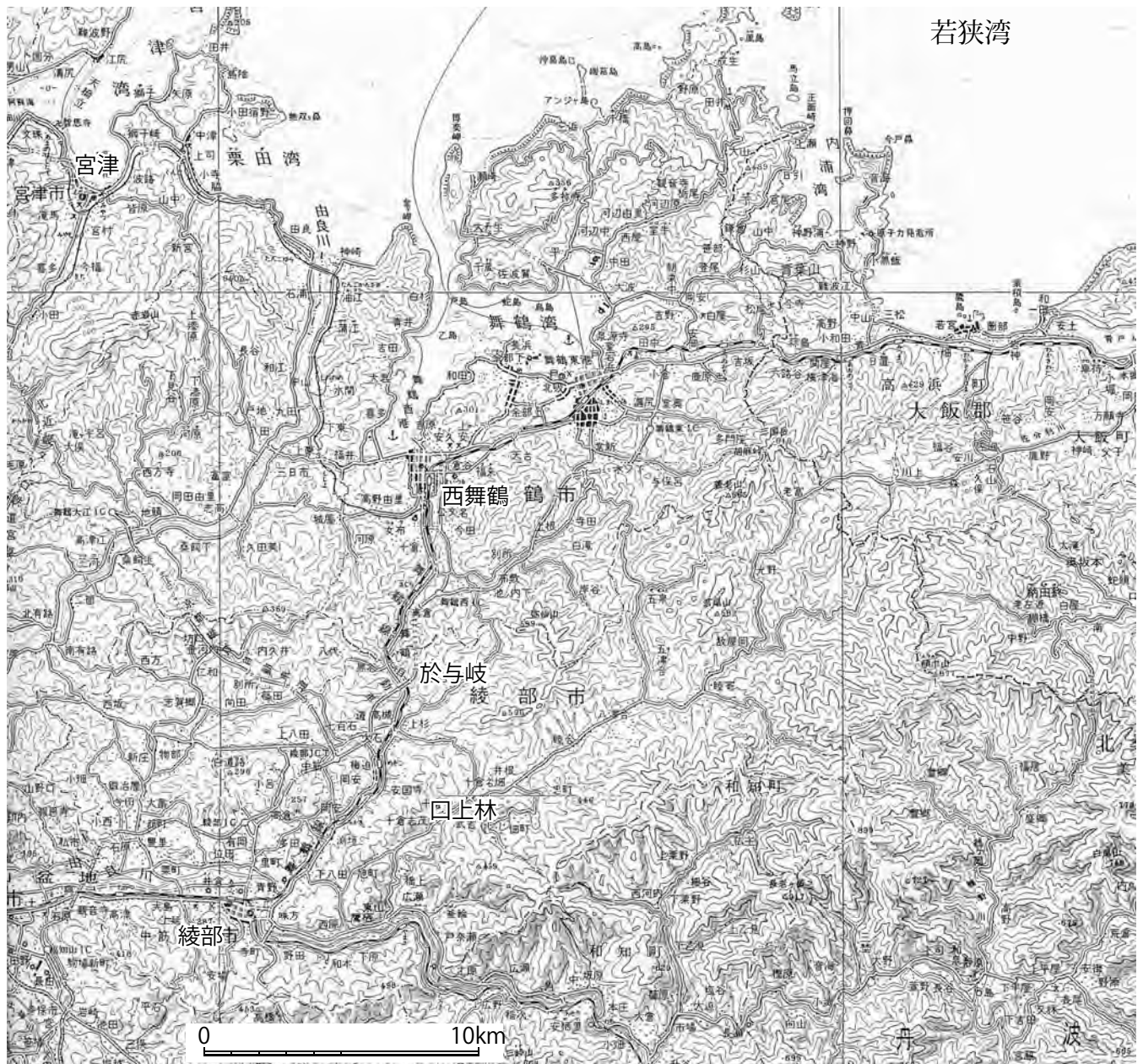
はじめに

背負い運搬具の負子は形態や名称に、地域差が比較的明瞭に現れる点で、民具研究の代表的民具である。

一番注目されるのが、荷物を支える爪の有無である。近畿地方を中心にして、西日本には爪があり、東日本には無いというように、日本の東西で分布がはっきりわかる⁽¹⁾。その他、地方名も東北のヤセウマ、関東のショイコ・セオイバシゴ、北

陸のセイタ、中・四国のオイコ、九州のカルイなど地域的なまとまりがある。丹後地域は、ほとんど無爪の負子で、名称はセイタ、セータであり、負子に関しては東日本の分布圏に属する。

もう一つ形態の違いとして見られるのが、背負うための部品の負縄である。これには、ランドセルのように2本1対の紐を上下の棧に掛けたものと、1本の紐を上の方の棧だけに弧を描くように掛けたものとがある。後者は研究上クビナワ式と呼ばれている。負子の研究者織野英史氏は前者を肩縄式、後者は胸元で紐を固定するので胸縄式と呼んでいる。紐は藁で編んだものが多く、間に布切れを編み込む場合もある。これまで、京都府内では



口上林位置図

胸縄式負子は確認されていなかったが、調査で綾部市の口上林郷土資料室に 1 点あるのが見つかった。⁽²⁾今回はこの資料の紹介と、負子の伝播について若干考えてみたい。

1 胸縄式負子

胸縄式負子は、肩縄式に比べて資料は少なく、分布的には東日本で多く確認されている。

文化庁が昭和37年(1962)から39年にかけて全国的に行った民俗資料緊急調査では、「クビナワ付きで腕木(爪)のないもの」として秋田 1 点、山形 2 点、宮城 1 点、新潟 2 点が確認されているが、⁽³⁾肩縄式に比べ事例は少ない。

胸縄式負子で、これまで最も西で分布が確認されていたのは福井県立若狭歴史博物館所蔵の福井県小浜市田島のものであったが、今回確認した口上林資料館所蔵のものは、管見の限り、現在京都府で唯一で、日本で最も西で使用された胸縄式負子になる。

さて、負縄に両形式が存在する理由については、明確なことはわからないが、縄だけで背負う負縄運搬にも肩縄式に両肩に紐を当てて背負う場合と、胸縄式に弧を描くように胸に紐を当てる場合とがある。下野敏見氏は、「一本縄頭抜き背負い」(胸縄式)は東日本に顕著で、西日本では山地と島嶼の一部に「点々と残存する」と述べていて、分布の偏りを指摘している。⁽⁴⁾京都府では、負縄に関しては、丹後・丹波において肩縄・胸縄の両形式が見られる。

2 上林の胸縄式負子の形態

上林の負子の形態は無爪鳥居三棧型である(写真 1)。棧は荷棧、負棧、下棧で、強化棧はない。材質は不明だが、縦木・棧は製材加工された約 3 cm 角の角材である。大きさは縦 84.5 cm (垂直長)、幅は荷棧と下棧ともに 43 cm、負棧は 39.8 cm である。

負縄は藁縄に布巻、荷縄は棕櫚縄である。荷を支える爪がないので、東日本に多い無爪形式である。背中の緩衝具は藁の横巻縄で、中に藁を緩衝材に入れている。

3 上林地域の生業と山仕事

口上林がある谷筋は、中世は上林郷と呼ばれ、谷に沿って上林川が南西方向に流れ、綾部市広瀬町で由良川に合流する。谷筋には府道 1 号小浜綾部線が通り、上流の峠を越えると福井県おおい町に到る。江戸時代には 37 箇村に分かれており、明治初期の村合併を経て明治 22 年(1889)からの市制・町村制施行による町村合併で、上流から奥上林、中上林、口上林の 3 箇村になった。⁽⁵⁾

川筋に田畑が広がるが、多くは山林である。

口上林地区在住の永井忠之氏(昭和 2 年生)によると、河岸段丘の畑では、桑の栽培が多く、養蚕も盛んで、繭は綾部の郡是製紙に出荷した。山林では、戦後のガスが普及する以前は、燃料の薪採取と炭焼きが行われた。

薪はオクドサンや風呂の燃料として、秋に山に取りに行った。冬は雪が 1 m くらい積もる寒冷地で、学校でもストーブを使用したが、その薪は各家から 2 束ずつ学校に供出した。ストーブは、毎朝ストーブ当番が点火した。

坂田充生氏(昭和 10 年生)は、自家用のワリキやオドロ(枝など細木)をフユゴシラエ(冬拵)として自家の山に取りに行った。ワリキやオドロは山に積んで乾燥させておき、必要なとき取りに行った。親から「取ってこい」と言われて、取りに行き、家の小屋に入れておいた。屋根裏に仕舞っておく家もあった。永井氏によると積んだ状態のものをニューと言ったという。坂田氏は山の奥のオクヤマまで取りに行くことはなかったという。

坂田家では冬場、炭焼きも行った。坂田氏は親の手伝いで炭を焼いたことがある。シロズミ、カタズミともに焼いたが、カタズミを焼き出したのは新しいという。⁽⁶⁾

炭山はクヤマ(区山)を入札で受けたが、場所によってナラ・クヌギ・カシなどの多いジョウヤマ(上山)と、ゾウキ(雑木)の多い山とがあった。シロズミは高温で燃やしたら早めにエブリで取り出すので、毎日窯出し作業があったが、クロズミは低温で窯口を綴じてじっくり焼くので窯出しも 1 週間に 1 度くらいであった。

焼いた炭は森林組合に出荷して検査を受けたが、販売先は記憶にないという。永井氏によると、シロズミは火持ちが良いので京阪地方に茶道用の炭などとして売ったり、中にはテンビン棒で担いで村々を売り歩いたりした人もいたという。

4 上林地域の人力運搬と負子

永井氏によると、薪の運搬は負縄を使い、ランドセルと同じように背負った。負子は一般的でなく、山仕事の人が使っていただけという。

川端二三三郎氏(昭和10年生)も子供のとき負縄で薪運びをしたが、負子は使わなかったという。

坂田氏も負子は見たことがない。鉄塔工事に来っていた朝鮮の人が長い負子を使っていたのを見たことがある程度である。恐らく朝鮮半島特有の叉木有爪の背架(チゲ)と思われる。

同氏もワリキ・オドロや稲藁などの運搬にはオイソと呼ぶ負縄を使ったという。稲藁は刈り取りの後、道沿いに立てていた栗のイナキ(栈は竹)まで運ぶのに使った。オイソは肩縄式のもの、胸縄式のものがあったが、前者の方が多かったという。口上林郷土資料室には2点藁製の肩縄のオイソがあり、肩当て部分は幅広に編んでおり、1点には布切れを編み込んでいる。坂田氏は、胸縄のオイソには適当な紐を使ったという。運搬のとき、紐端は手で引っ張って荷を支える場合(写真2)と、胸でしっかり結ぶ場合とがあったという。

上林地域の一つ西側の谷に位置する綾部市於与岐町大俣でも多くの人が炭焼をしたが、負子については、「オイダイは上林の谷では前からしていたが、この村では最近の風」であると言われている。⁽⁷⁾同地区でも、おそらく上林地域同様負縄が一般的だったと考える。「上林の谷では前からしていた」とあり、上林地域では多少なりとも負子は使用されていたことが推察されるが、聞き取りから一般的ななものでは無かったと思われる。

5 負子の伝播

以上、綾部の上林地域の谷筋と大俣地区では、負子は一般的でなく、新しく伝播したことが推測

されるが、京都府北部の丹後地域では広い範囲で使用の伝承があり、当館や市町の資料館にも多くの資料が保存され、日常一般的に使われた運搬具であった。当地域ではセイタ(背板)、セータと呼ばれた(以下背板と記述)。一方丹波地域南部から山城地域においては負子の資料はほとんど残されていないので、使用されていなかったと考える。

丹後でいつ頃からセイタが使用され始めたかは今のところ不明である。昭和37年度の京都府緊急民俗調査では、7地区のみで伝播に関する事項が報告されている。その報告書によると、宮津市上世屋では明治41年(1908)の大火以前は背板はなく、それ以前はオイソ(負縄)で荷を担ったという。京丹後市丹後町袖志は「40～50年前に碇峠を越えて入って来て普及したもの」で、以前はツナで背負った。同所は岩海苔の生産が今でも行われているが、製品の手付は箱に入れ、ツナで背負って丹後近隣の村や町を行商して売った。

伊根町平田も50年程前(大正初期)、京丹後市弥栄町野中も50年程前に伊根町筒川から「はやり」出してから使い始め、最初は梯子を背負っているようだと笑われたという。同所では、以前は麻綱のジガイヅナで炭などを背負った。弥栄町須川味土野でも時期は分からないが、背板が入る以前はシナのオイソを使ったということなので、背板の使用は後になって伝播したことが分かる。舞鶴市田井でも山に行くとき背板を使ったが、昔は無かったという。

以上の少ない事例だが、調査報告から丹後では明治末から大正初期くらいに使用され始めたことが推測され、背板以前は負縄が一般的だったことが窺える。

自身の聞き取り調査でも舞鶴市野原では、ワク(背板)はおもに男性が使い、女性はオエソ(負縄)で薪や稲藁を運び(写真3)、同じ大浦半島の大丹生、佐波賀もオイソで薪を運んだ。

また舞鶴市神崎では、揚げ浜製塩が盛んだったが、燃料のオドロ(薪)取りには、オイナワを使用した。そのとき緩衝のため背中当てを縫い付けた丈夫なオオサッキョリを着た。⁽⁹⁾

いずれにせよ、確定はできないものの、背板は

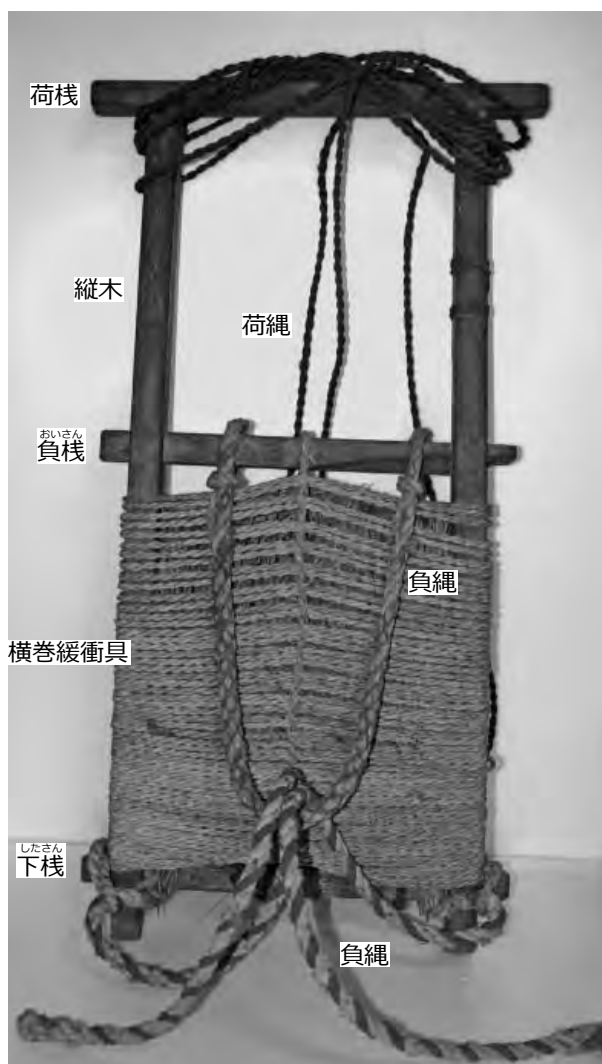


写真 1 無爪鳥居三棧型胸縄式負子 口上林資料室所蔵



←写真 2 胸縄式の負縄で荷を運ぶ姿 京都市左京区久多

手で紐を引っ張って荷を支えている。手を離すことで簡単に荷を下ろせる。



↑写真 3 オエソ 舞鶴市野原 当館

胸縄式の負縄。野原では女性が焚きつけ用の小枝や稲藁を運んだ。

ワクは女性に使わなかったという。資料名は聞き取りの話者の呼称に従った。

比較的新しい時期に他所から伝播されてきたと言えるが、どの地域から伝播したかは、記録・伝承がないので不明である。だが、丹後の背板のほとんどが、東日本に分布する無爪の背板なので、東日本から伝播したことはほぼ間違いないと考える。

6 上林胸縄式負子の伝播

上林地域では、聞き取りから自家用のワリキ・オドロはオイソを使用しているので、先に述べたようにこの地域の人にとって負子は日常生活民具として基本的に使われなかったと考えるが、永井氏は山仕事を専業とした人が使っていたと述べているので、林業関係の仕事に携わった人による使用はあったと考える。

永井氏によると、東北や信州などから来て地区の山を入札で受けて炭を焼いていた人もいて、中には地区に永住した人もいるという。教師をしていたときそうした山仕事をする家族の子供が3、4人、山に建てた炭小屋から通っていた。また他県から来た人は炭焼き以外でも、村有林の山の手入れの仕事を頼まれてやっていた。また夫婦で炭焼に来て、妻が製品を頭上運搬で、舞鶴に売りに行った。頭上運搬については「土地のものにこのような風はなかった」という。

口上林の負子は1点だけだが、形態は無爪で、さらに胸縄式であるため東日本からの伝播が想定され、信州や東北方面から山稼ぎにきていた人がいるので、この地域への負子の導入はこうした東国からの出稼ぎの人々によるものと想定される。

7 若狭・越前の負子

上林地区の北に隣接する若狭地区にも事例は少ないが2点胸縄式負子が伝承されている。1点は先述した小浜市田鳥地区収集の無爪鳥居三棧型負子(地方名セイタ)⁽¹⁰⁾、敦賀市立博物館所蔵の敦賀市蓬萊町地区収集の無爪井桁三棧型負子(地方名不明)⁽¹¹⁾である。後者は、旧所蔵者が故郷の福井県越前町城ヶ谷地区から持ってきたとされる。越前町の胸縄式負子の事例としては、織野氏収集の旧織田町上戸収集の無爪鳥居三棧型負子がある⁽¹²⁾。

小浜市田鳥で胸縄式負子も含め負子が一般的だったかはわからないが、小型背板状の背中当を使つての負縄運搬は行われていた。田鳥須ノ崎の大戸利男家では、セナカテと称す小型背板状背中当⁽¹³⁾を使つて山の割木や椎茸の原木運びに使つた。割木は船に積んで小浜まで売りに行った。セナカテで背負うときは1本の縄を使つて胸縄式に背負つた。セナカテは負縄二本の両肩担いで背負うが、基本的に背中⁽¹³⁾の緩衝材で、荷を背負うのに使うのは負縄で、それとセナカテとはつながっていない。

田鳥と同じく若狭湾に面した小浜市宇久の新谷初枝氏(昭和9年生)も長さ約40cmの小型背中当を使つて、オエソと呼ぶ縄で胸縄式に荷を背負つた。セタと称した負子は男の人が使っていたという。

福井県内では、その他、福井県文化財保護センター所蔵のものがある。同センターには8点の負子があり、3点が胸縄式、2点が肩縄式、3点は負縄が付いていないものである⁽¹⁴⁾。胸縄式3点の内、1点はあわら市前谷、もう1点は福井市安波賀町からの収集である。もう1点福井市農協旧蔵なので、同市内収集と思われる。

その他、北陸地区では、富山県氷見市の氷見市立博物館に2点胸縄式負子がある。1点は氷見市余川⁽¹⁵⁾、もう1点は、同市小窪収集のものである⁽¹⁶⁾。余川⁽¹⁵⁾のものは所有者が富山県立山で荷物運搬のボツカをしていたときに使っていたものである。長さは52cmと短い、鳥居棧は70cmと極端に長い特異な形をしている。同様な鳥居棧が長い形態⁽¹⁷⁾のものは、石川県白山市白峰にある石川県立白山ろく民俗資料館所蔵のものがある。負縄は肩縄式で、一度に大量の炭俵を背負い、麓の町場まで運ぶのに使つた。

まとめ

上林の胸縄式負子の伝播については、地区で負子自体が一般的でなかったこともあり、聞き取りでは十分なことが得られなかった。同地区は若狭に接し、丹波から若狭へ抜ける街道が通っている。これも含めて資料の分布的想定から、福井県

や富山県など北陸地域との伝播の関連も考えられる。

昭和37年度の京都府緊急民俗調査報告書に、丹後の背板について、明治末から大正初期に、京丹後市丹後町袖志と伊根町筒川に東の伊根方面から伝播したとあるのが注目される。この時期の丹後の漁村では日高式大敷網が導入されたことが大きな出来事で、これによって飛躍的に漁獲量を上げることができた。最初は明治38年(1905)に、京都府の水産講習所長牛窪其三夫氏によって、高知県から伊根浦に導入され、間を置かず舞鶴市田井・成生にも導入された。大正初期漁獲量が減ったことにより、大正3年(1914)に、富山県の氷見から改良された上野式鰯大敷網が導入されて漁獲量を上げることができてから丹後では同網に変わっていった。⁽¹⁸⁾

舞鶴市田井では、地元の住民だけでは大敷網の従事者が足らず、富山県や福井県から人を雇っていた。冬場海が荒れて漁ができない沿岸部の地域の人々が来ていたという。夫婦で来て、番屋に泊まり込みで働く人もいた。こうした大敷網の漁撈を通じての北陸との交流が背板伝播の契機になったことも想定される。

織野氏の研究によると、徳島県美馬郡木屋平村の人々が使っていたオイダイ(負子地方名)は、大正時代に九州で椎茸作りをしていた茸師(ナバシ)が、隣村一字村で栽培を始めたことにより、もたらされたことを明らかにしている。⁽²⁰⁾

大分県は江戸時代から椎茸栽培が盛んで、他県に出かけての栽培も行っている。茸師の使っていた負子は朝鮮の叉木を加工したチゲに似た独特の形態の豊後型有爪負子である。爪は一般的なチゲと異なり別材のホゾ差しだが、縦木が極端なハの字に開き、身体に対して内側に湾曲し、爪の位置が高い形はチゲと同じで、朝鮮からの伝播が想定されている。⁽²¹⁾

茸師は四国や中国地方の各地の山地にも出かけて椎茸栽培を行っており、そうした場所でも豊後型有爪の負子が伝播している。

丹後・丹波の無爪型が、東国、特に北陸地方から伝播したかどうかは、資料や聞き取り調査で確

認できていないので、現時点では可能性でしかない。今後の新出資料の発見と、聞き取りや文献調査で明らかにしていきたい。

注

- (1) 磯貝勇「背負い梯子―背負い運搬とその用具―」『日本の民具』岩崎美術社 1971
- (2) 口上林郷土資料室は、2005年に廃校になった口上林小学校の1室を、同校収集の史資料を中心に展示する歴史・民俗資料館である。他の部屋は黒谷和紙の伝承施設「黒谷工芸の里」として利用されている。
- (3) 文化庁編『日本民俗地図Ⅳ交易・運搬』財団法人国土地理協会 1974
- (4) 下野敏見「背負い縄と背中当」『日本列島の比較民俗学』吉川弘文館 1994
- (5) 『綾部市史』下巻 綾部市役所 1979
- (6) 福知山市夜久野町では、白炭は3日、黒炭は1週間のサイクルで焼いた。黒炭は、戦中の国策としてガソリン燃料の代用の奨励や戦後の資源不足から生産が増大した(『夜久野町史』第1巻 夜久野町2005)。
- (7) 『丹波地区民俗資料調査報告書』京都府教育委員会 1965
- (8) 『京都府緊急民俗調査報告書 京都府の民俗』京都府教育委員会 1962
- (9) 『ふるさとの塩づくり』京都府立丹後郷土資料館 1991 p.13図版
- (10) 『丹後の背板』京都府立丹後郷土資料館 2012 p.27図版
- (11) 注10同書 p.26図版
- (12) 注10同書 p.26図版
- (13) 注10同書 p.20図版
- (14) 福井市おさごえ民家園の竹腰学氏の御教示による。
- (15) 注10同書 p.25図版
- (16) 注10同書 p.25図版
- (17) 注10同書 p.30図版
- (18) 井之本泰「丹後ブリ大敷網導入前後」小島孝夫編『海の民俗文化―漁撈習俗の伝播に関する実証的研究―』明石書店 2005
- (19) 注18同書
- (20) 織野英史『背負い梯子の研究』慶友社 1999
- (21) 注20同書

【資料紹介】**由良加藤家文書「恵比寿講帳面」**

資料課 吉野健一

はじめに

本年度の特別展「大海原に夢を求めて―丹後の廻船と北前船―」では、現在までの研究の成果を踏まえ、丹後地域の海運の様相について、現物資料も含めた展示を行った。その準備の過程において、宮津市由良や舞鶴市神崎など、江戸時代から明治時代にかけて船頭や船乗りを多く輩出した地域から、新しい資料が複数発見、また再確認された。一部は展示でも紹介したが、大部分は未整理の状況であり、現在も丹後郷土資料館において調査を進めている。

さて、由良出身の船頭として三上家所有の船などに乗り組み、北海道や大阪まで航海を行っていた加藤家には、海運に関わる史料が数多く伝わっている。この中には、由良や神崎の船頭、乗組員などが組織し、幕末から明治時代まで活動が確認される恵比寿講関係の文書がある。本稿では、このうち、由良や丹後の海運を考える上で大変重要な史料である、文久3年(1863)の講の組織に際して作成された「恵比寿講帳面」について、写真・翻刻とともに紹介する。(写真・翻刻は19頁～16頁)

1 恵比寿講帳面について

「恵比寿講帳面」の形状は、横20.5センチ、縦28.3センチの縦帳で、恵比寿講の講箱に入れられていた。講箱の表には、「文久三癸亥年／十一月恵美寿講帳面箱／年番持」とあり、文久3年(1863)に講箱が作成されたこと、講箱が恵比寿講の年番により持ち回りされていたことが判明する。講箱は、本史料以外に「船頭年行事扣帳」など、幕末から明治にかけての帳面が複数入った状態で保管されていた。

さて、以下にこの「恵比寿講帳面」から分かる内容を検討したい。まず、文書の前段で恵比須講を組織するまでの経緯を記すが、これによれば、

①恵比須講には「由良海道船の船頭」と「他所出之船頭」が参加していること、②「去子」年の暮から問屋などと講の組織につき相談をしていたこと、③講の組織に当たっては神酒を交わし、規定を定め、船頭中が連印をしたこと、④水主(乗組員)には船頭からこの内容を申し聞かせること、⑤心得違いものがあれば、船頭・水主とも仲間から除くこと、が判明する。

「由良海道船」とは、由良川筋で往来をする川船、「他所出」は、廻船や北前船といった海に漕ぎ出す船のことと考えられ、川船の船頭も講組織に加入していたことが推定される。後の時代になると、講の規定で遠隔地との取引を前提としたものが増えることから、川船の船頭や乗組員の影響力は、相対的には減少したと思われる。一方、水主には船頭からこの内容を申し聞かせることから、講が成立した段階では、基本的に船頭のみが構成員であったと考えて良いだろう。明治時代になると、「乗組船中惣年番」などの記載が散見されるようになることから、船頭とは別に、乗組員も後には講に加入していったようだ。

2 恵比寿講の規定内容

さて、以下に規定内容について検討する。まず、船頭について、長逗留の際に油断をし、賭博や酒、遊女通いなどにふけり、仲間中から注意しても聞き入れが無い場合には、金銀や荷物を問屋と水主立会のもとで取引問屋に預けた上で、講仲間の水主によって国元の船主に早急に連絡することが定められている。また、船子が船頭に無断で陸で寝泊まりすることが禁じられた他、水主の逃げ出しや船頭の油断につけこむこと、船主や船頭へ損を



由良港に停泊する廻船（近代絵はがき）

掛けの場合には仲間の船に乗せないこと、などが定められた。

上記の事柄のうち、水主の逃げ出しである「途中揚げ」や、荷物を粗末に扱う事例は一定程度あったようで、関連資料から、明治9年から13年にかけて、これらの事例が14件発生していることが分かる。このうち、「途中揚げ」は、新潟や酒田、下津井、大阪などで起こっている。

また、明治9年(1876)、糸井善四郎船で「積入米之義不法致」した人物については、「蛭子講御仲間衆方御規則之通、金五円宛罰金被仰付」と実際に罰金が科されている。この例では、罰金に加え「乗組御差止」になれば、「今日之生活無覚束、且者金策才覚等困却」する、などとして、これらの処分が行われないよう願った証書が提出されている。

3 講組織と構成

講が組織された時期については、記載の通り文久3年と考えられ、その際に講の「年行事」を4人が入れ替わりで勤めることも示された。

署名している人々は、脇が15人、浜野路が21人、東崎が3人、他が3名の計42名である。「東崎」は、現在どの地域に当たるか不明であるが、由良村内とみられ、この段階では神崎村の船頭の存在は確認できない。講に参加する人数は、明治時代に入って増加したようであるが、具体的に何名程度まで拡大したのかは不明である。

同年に作成された「船頭年行事扣帳」には、年行事として「九郎右衛門／伊平次／定助／平五郎」の名前が見え、その後も4人態勢で年行事の割り振りが続いている。また、「右之通り四人之内二而、壹ヶ年ヅ、宿可仕定メ」とあることから、4人の年行事のうちの一人が講宿を勤めたことも判明する。明治6年(1873)の同様の史料には、4人ずつ7組に年行事の輪番が割り振られている。その後、年行事の数は減少したようで、はっきりとした経緯は不明だが、明治30年代には、1名になったようである。

年末詳1月27日付の神崎村「船頭中」から由良村「船頭中」に宛てた書付に、「船中間御衆中

様御参会有之様子御申越被下」と見える。この「参会」は、恵比寿講の会合であったと考えられ、恵比寿講は、例年年末か年始に行われていたことが推測される。一方で、積荷の運賃や船乗りの給金等に触れている史料もある。

これらのことから、この恵比寿講は、由良村の船頭や乗組員を中心に組織され、廻船内での秩序の維持について規定や罰則等を定め、それを実際に運用することにより、安定的な航海を行うことを目的として組織された可能性が高いことが分かった。まだ不明な点も多いが、当時の海運の具体的な様相を伝える貴重な資料である、ということができよう。

おわりに

今回は、由良や神崎の船頭や乗組員らが組織した「恵比寿講」について、その当初の規約書である「恵比寿講帳面」の紹介を行った。今後、関連資料等を含め更に分析を進めることで、当時の由良・神崎の船頭や乗組員達の活躍の様子が明らかとなり、丹後海運の実態への理解が更に進むと考えられる。

注

- (1) 丹後地域の海運に関する主要な研究等として、池田魏一郎「旧幕時代の由良港について」(『郷土と美術』4-2, 1942)、松本師正「由良の船絵馬」(1977)、小谷一郎「由良船頭衆」(『由良の歴史』1号、由良の歴史をさぐる会、1978)、真下八雄「丹後の廻船業」(中嶋利雄・原田久美子編『丹後に生きる京都の人々』三省堂、1987)、当館図録『由良金毘羅さんの船絵馬』(1982)、自治体史として、『舞鶴市史』『福知山市史』『大江町誌』『与謝郡岩滝村誌』などがある。
- (2) 「恵比寿講帳面」は、上記「由良の船絵馬」において松本氏が翻刻・史料紹介を行っているが、現在入手が困難であり、また翻刻の一部を修正したため、改めて紹介するものである。
- (3) 加藤家文書やそれ以外の由良や神崎に残る資料で、現在確認された中では、文久3年以前に類似の講などが組織されていたことを示すものは見られない。

明治10年代の史料には、「船中乗組惣代」の名前に神崎村の人物が見られ、後には恵比寿講に神崎村の人々も参加していたと考えられる。

ハ 惣八(印)
 ハ 市太郎(印)
 ハ 喜六(印)
 ハ 長五郎(印)
 ハ 市郎兵衛(印)
 ハ 久右衛門(印)
 ハ 平左衛門(印)
 ミ 弥左衛門(印)
 ハ 惣治郎(印)
 ハ 亦市(印)



ツ 半四郎(印)
 マ 徳兵衛(印)
 ワ 利喜蔵(印)
 ワ 与助
 マ 市五郎(印)
 ワ 初蔵(印)
 ハ 亦蔵(印)



恵比寿講講箱（加藤家文書）

恵比寿講講帳をはじめ、講に関する古文書が
 収納されていた。

箱の表面には、「文久三癸亥年／十一月恵美
 寿講帳面箱／年番持」との記載がある。



申候、為後証、依而如件、

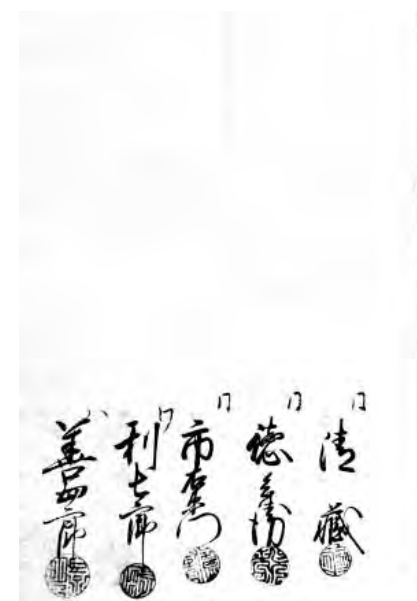
脇村 九郎右衛門(印)
同 吉兵衛(印)
同 良助(印)
同 善三郎(印)
同 伊平次(印)



同 定助(印)
同 文蔵(印)
同 平五郎(印)
同 善助(印)
同 与八(印)
同 与次右衛門(印)
同 平助(印)
同 万吉(印)
同 文助(印)
同 弥七(印)
同 濱野路
同 弥七(印)



同 伝七(印)
同 六兵衛(印)
同 替蔵(印)
同 藤右衛門(印)
同 嘉市郎(印)
同 清蔵(印)
同 徳兵衛(印)
同 市右衛門(印)
同 利七郎(印)
同 善四郎(印)



仲る人より金を取らる可
し彼れより軍入るに金くらゐり
其所より同家より金も取らる
方より諸行物より同家水主より
金より同家預け金より金より

同家より仲る水主より同元
親方は早速お返し下さい

一 船主より船頭より同家より
金より同家より金より

一 水主より船頭より同家より
金より同家より金より

仲間人たり共、無遠慮、急度可

申渡候、其上聞入も無之候ハ、其旨

其所之間屋江申達シ、金銀者

不及申、諸荷物とも二間屋・水主立会

之上引取、問屋江預け置可申候、其上

問屋連印之仲間方水主ヲ以国元

親方江早速相達可申候事、

一、船子之者、船頭二用向無之、陸二寝泊り
いたし候儀相成不申候事、

一、水主何国二而も、逃ヶ走りいたし候者ハ

右連印仲る方より金組より金
より

一 何れより船頭より金より
る諸行物より同家水主より

何れより船頭より金より
る諸行物より同家水主より

一 水主より船頭より同家より
金より同家より金より

右連印仲間之内江乗組相成間敷

候事、

一、何国二而も船子、船頭江ゆすりケ

間鋪儀、亦者途中二而隙杯ヲ取

候者ハ、連印仲間江者乗組不相成

候事

一、水主乗組出入仕候砌、外船江聞合
いたし候共、前之船頭江得与聞合
之上、相定可申候事、

一 親方より船頭より同家より
金より同家より金より

何れより船頭より金より
る諸行物より同家水主より

一 水主より船頭より同家より
金より同家より金より

一、親方并船頭江損銀掛候水主者、

連印之内江者乗組堅ク無用之事、

右前文相定候上者、サシニも相背申

間鋪候、連印仲間ハ不及申二、水主

不埒之者有之候ハ者、其旨船頭江可

申出候、則例年之行司として、四人宛

入替二相勤申候二付、船頭・水主共年行司
江案内可致候、又年行司方ハ仲間江
及披露可申候事、

右之条々心得違無之様相勤メ可

又久三癸亥年

恵比寿の儀帳面

十一月吉日

一、此度海上為安全、十一月中恵比寿講
と而、由良海道船之船頭中并他所
出之船頭一統仕御講取立、商売等
出情仕度候、并仲間互二氣ヲ附、万端
致吟味、規定書相認メ可申旨、去ル

【恵比寿講帳面 翻刻】

(表紙)

文久三癸亥年

恵比寿講帳面

十一月吉日認之

一、此度海上為安全、十一月中恵比寿講

と而、由良海道船之船頭中并他所

出之船頭一統仕御講取立、商売等

出情仕度候、并仲間互二氣ヲ附、万端

致吟味、規定書相認メ可申旨、去ル

あつたふり、向て及相終り、其
儀等、直に申上り、御座候儀、
進上、御座候、御座候、御座候、
今度、申上り、御座候、御座候、
去ル、一札仕候、御座候、御座候、

一、何國入船仕候共、船頭儀日相待、
長逗留二相成、売買二油断相見へ
心得違いたし、亦者博奕・大酒・遊女
杯二身ヲ入申候模様有之候ハ、右連印

子之暮方、向寄二及相談申候所、其

儀皆々宜様被申候付、弥恵比寿講二而

進セ、神酒申候、依之不勤不埒無之様

今度相改、堅ク規定仕、惣船頭中

連印一札仕候、并此儀水主之者江も

為申聞、万事不埒無之様可申渡候、

規定之儀者左二夫々相作置候間、得与

承知可有之候、若又心得違之もの

有之候ハ、船頭・水主共、此後無遠慮

仲間相除キ可申候、為後日之依而如件

規定

一、何國江入船仕候共、船頭儀日相待・

長逗留二相成、売買二油断相見へ

心得違いたし、亦者博奕・大酒・遊女

杯二身ヲ入申候模様有之候ハ、右連印

平成 27 年度の資料整理

今年度整理したのは、下記のとおりである。

1 民俗資料

(1) 漁撈用具の整理

平成27年度の漁撈具の国登録有形民俗文化財への登録に向けての整理作業を行った。登録資料888点の選別とリスト化を行い、他の漁具と分けて収納した。

26年度末に第2保管庫が新築され、木製仮小屋の4艘と本館展示室、軒下に収納していた漁船各1艘を収納した。また、別棟プレハブに収納していた櫓、櫓、船大工道具など船関係資料も第2保管庫に整理して収納した。

(2) 上野弥一郎家衣料 196点 舞鶴市西方寺

上野家から寄託されている衣料に寄託番ラベルを添付し、リストと照合できるようにした。

(3) 上仲茂生家宮津・橋立人形

宮津・橋立人形は昭和初期の京都府の農村副業政策で製作されるようになった観光土産人形である。当初は勤労風俗人形ということで、地域性が特でない各種職業の働く人々の姿の人形であった。しかし、売れ行きが良くないため天橋立名物の股のぞきを模した人形が製作され好評を得た。戦後は衰退し、存在も忘れられている。上仲茂生氏の父保治氏が職人として製作されていた。そのため同家には作品と道具が残されており、今回借用して、撮影と採寸及びリスト化の作業を行った。



2 考古資料

(1) 収蔵庫マップの作製

収蔵庫内を点検・整理して、収蔵資料保管場所リストを更新するとともに、収蔵庫マップを作製して資料の保管・管理の便を図った。

(2) コンテナラベルの転記

コンテナに貼り付けたラベルが脱落するおそれがあるため、今後予想される資料の移動に備えて、すべてのコンテナにラベルの内容を直接書き込んだ。

(3) 資料の実測等

ふるさとミュージアムコレクションに出展する資料、本冊子で紹介する資料のうち、未実測のものを図化等する作業を行った。

3 歴史資料

(1) 館蔵古文書目録のデータベース化

昨年度に引き続きデータベース化を行うとともに、今年度新たに整理した目録のデータ化も行った。項目は、作成日時・文書名・差出及び宛名・員数などの中核部分に絞って行った。整理済み点数と文書群は以下のとおりである。

・文書群55件、計約33,000点

(2) 館蔵古文書資料の目録整理

当館に寄附・寄託された未整理の古文書及び特別展準備のための資料調査を行い目録を作成した。

・与謝郡日置上村山口家文書 約3,000点

前年に引き続いて実施した。今年度も、江戸時代後期から幕末にかけての書状や一紙文書を中心



第2保管庫収納状況

として整理を行った。

- ・丹後国加佐郡由良村加藤家文書 約3,500点
北前船の船頭を務めていた加藤家に伝わった資料である。江戸時代から明治時代にかけての資料が中心で、特に航海中の日誌類や寄港地の問屋などとのやりとりの証文類・手紙類が多い。

ほか 6 件約1200点の整理を行った。

(3)古文書調査

・安久家文書

一昨年度で目録作成を完了し、本年度は千葉大学の菅原憲二氏を中心に、整理目録の点検を行った。今後のデータベース化、目録刊行に向けた準備を進めている。

・丹後国宮津町船問屋文書

京都府立大学の藤本仁文氏と、府立大学の学生により資料の整理と目録取りの作業を行った。

これらの資料は、調査完了の上準備が整い次第公開することとしている。

4 写真等整理

写真カードのデータベース化を継続して行った。カードの内容をエクセル入力し、データベース化して検索の利便性を向上させた(今年度末で約5,500枚終了)。

館蔵のDVD311点、VHS277点、講演記録カセットテープ301点の分類収納整理と検索用のデータベースを作成した。また、戦前から戦後の未整理だった観光パンフレット137点も分類収納整理を行い、検索用のデータベース化を進めた。

5 資料の受け入れ

今年度新たに受け入れた寄附資料は 1 件で、下記のとおりである。

【寄附】

○京都府立城丹農事講習所卒業アルバム

1 点



古文書調査状況



宮津船問屋文書

丹後学び舎セミナー活動報告

1 紙すき教室

平成27年度の紙漉き作業は以下のとおりである。今年度の教室受講生は3名であった。今年はマグワと漉き簀の補修をした。

5月13日(水) 楮畑の草刈り、「二股和紙」映像の鑑賞

楮畑の刈り取りと施肥を行った。肥料は鶏糞と石灰を株回りに撒いた。トロロアオイは同好会の会員が分担して各自の畑で栽培した。資料館も一畝職員で栽培した。福知山市大江町の二股和紙の記録映像「二股和紙」を同好会の研修で鑑賞した。

7月16日(木) 草刈り

8月3日(月) 草刈り

10月3日(土) 草刈り

草刈りの合間に細い楮を間引いた。

10月8日(木) 杉原和紙の見学

兵庫県多可郡多可町で杉原和紙を伝承している「杉原和紙研究所」を見学し、体験も行った。

11月14日(土) 教室①カゴカリ

カゴのカリトリを行う。蒸し桶の深さを考えて、今年は長さを120cmから130cmに長くした。翌日、道沿いの楮も刈る。蒸し釜・桶の準備。三脚の竹を新調。水を釜の羽の高さまで入れる。桶は水に濡らして乾燥をもどす。カゴの小枝を釜の底に敷く。

11月15日(日) 教室②カゴムシ・カゴヘギ

8時30分釜の火入れ。10時1回目のカゴ投入、10時45分頃蒸し上がり、カゴヘギ。計3釜蒸す。蒸し時間が1時間以内と短かったせいか、叩くときカゴが硬く繊維にするのに時間が掛かったので、充分蒸す必要があるとの反省がでた。

11月20日(金) カゴの川浸け

カゴを束ね、重石をして川に浸け、乾燥を戻す。

11月21日(土) 教室③カゴヘギ

川でカゴの表皮のアラカワを足で踏むカゴフミを行い、永島家座敷でカゴナゼ包丁で表皮を剥ぐカゴナゼを行う。剥いだシラカゴは川で洗って軒の竿に干す。今年は洗濯機で脱水して干した。カ

ゴに砂が付くのでカゴフミをする川の砂をさらう。

11月22日(日) 教室④カゴヘギ

前日同様カゴヘギ行う。

11月23日(月) カゴヘギ

カゴヘギするも、すべて終わらず。残りは保存用とする。幅広の皮は、細く叩きやすくするため、裂いておくべきとの反省がでる。

11月27日(金) カゴ川浸け

収量を量る(約12kg)。乾燥を戻すため棕櫚紐で束ねて上下2箇所結び、大きく2束に分けて川に浸ける。束どうしはロープでつなぐ。ネットを被せ、重石をして浸ける。釜を洗い、水を張る。

11月28日(土) 教室⑤カゴニ

8時30分頃釜に火入れ。カゴ半分を川から上げて竿に掛け水を切る。10時30分絞って釜に石灰(量の15%)と一緒に投入。約40分で煮上がり、スキブネに入れる。残り半分を煮て永島家の大釜の湯に浸けて蓋をして蒸す。合間にトロロアオイを木槌で叩いて潰し、ポリバケツのホルマリン入りの水に浸ける。今年は去年の反省から多めに1ビン入れる。

11月29日(日) カゴの釜揚げ

大釜で蒸らしたカゴを上げ、スキブネに浸ける。夕方と翌30日と2回水替えする。

12月1日(火) 道具準備

スキブネ、カミツケ台、スキワク、カゴウチ台を設置する。数枚試し漉きをする。

12月2日(水) 同好会の紙漉き

今年は蒸しが弱いせいかカゴが硬い。細い繊維が残る。トロロアオイの利きが悪い。細かくつぶしていないせいだと考えられ、叩きなおす。

12月3日(木) 教室⑥紙漉き

12月4日(金) 卒業証書紙漉き

午前に府中小学校14人、午後に日置小学校3人の6年生が卒業証書用の2枚重ねの紙を漉く。

12月5日(土) 和風用の紙漉き

こども体験教室「和風を作ろう」の風の和紙を参加者2組の家族4人が漉く。

12月6日(日) 同好会の紙漉き

チリ入りなどの和紙を漉く。14時30分頃から

片付け始め、紙をプレスにセットして16時頃終了。一晩、ジャッキと板の重量だけで水を絞る。

12月7日(月) 紙絞り

午前、昼過ぎ、夕方、夜と4回に分けてジャッキを回して絞る。

12月8日(火) 教室⑦カミツケ

絞りきれておらず、絞りなおす。絞り過ぎはよくないと保存会員の意見があった。そのせいか今年は乾燥で皺になるものが少なかった。乾燥した紙は例年どおり漉いた人ごとに分けて置いていく。

12月9日(水) 片付け

乾燥機など残りの道具の片付けを行う。

2 見て、触れて考古学

丹後学び舎セミナーとして行っている体験的な活動の4年目となる今年度は、中世の山城を取り上げた。2回の現地見学の後、見学した山城や発掘調査された山城の図面や写真を見ながら、山城の見どころを解説するとともに、縄張調査、発掘調査など、山城の調査方法の違いとそれぞれの特徴についても解説する復習講座を設けることで、図面や写真だけではわからない臨場感をもって理解を深めていただけるよう、現地見学と座学の両方を組み合わせた3回シリーズで企画した。

第1回 吉原山城跡を歩く 11月27日(金)

荒天のため中止。

○所在地 京丹後市峰山町吉原

○時間 午後1時30分～3時30分(予定)

吉原山城跡は、権現山山頂一帯に所在する山城で、一色氏の一家衆吉原氏の拠点で、一色氏滅亡後には細川氏が入ったとも言われている。

権現山は、京都府歴史的な自然環境保全地域に指定されて遊歩道が整備されているため、比較的登り易いが、当日は冷たい雨の降る悪天候となったため、やむなく中止とした。

第2回 弓木城跡を歩く 12月12日(土)

○所在地 与謝郡与謝野町字弓木

○時間 午後1時30分～3時

○参加者 16名

弓木城跡は、与謝郡岩滝町字弓木の阿蘇海を見

下ろす丘陵頂部に所在する山城である。城主は稲富氏で、一色氏が最後に陣を構えた城と伝えられている。

現在は、遊歩道が整備された自然公園になっているので、容易に見学できる。

第3回 復習講座 1月9日(土)

○会場 当資料館

○時間 午後1時30分～3時

○参加者 35名

吉原山城跡、弓木城跡の写真や図面を見ながら、城郭用語、縄張図の見方などを解説した後、発掘調査が行われた舞鶴市の大俣城跡、綾部市の平山城跡、京丹波町の三ノ宮東城跡について、同じアングルから撮った調査前と調査後の写真を見比べるなどして、縄張調査と発掘調査それぞれの特徴や違いを解説した。

3 古文書講習会

昨年度に引き続き、毎月1回2講座(入門編・実践編)を実施した。実施日は、6月6日から3月12日までの9回の土曜日に、各午前・午後で計18回行った。参加者は入門編が延べ209人、実践編は延べ155人であった。

入門編

今年度は、漢字の偏や旁といった部首ごとの崩し方や、平仮名・片仮名の様々な崩し方など基本的な部分に重点を置きながら講座を進めた。資料としては明治時代の広告である引札や、江戸時代の刊本などを利用して行った。

実践編

昨年度に引き続き、宮津城下で町名主などを務めた三上家の古文書のうち、文政10年(1827)年以降の職務日誌である「日記」を読み進めた。本年度の講座終了時点で、文政12年6月頃まで(見開き約80頁、計1万6千字余り)の解読を終えた。藩主の昇進に際しての領内の様子や、「御救米」についてのやりとりなど、町名主の職務の詳細や当時の世相を確認することができた。

平成 27 年度のあゆみ

4/1 常設展「海国・丹後を巡る－丹後の歴史と文化－」 (～3/31)

4/3 京都新聞コラム「京・丹波・丹後 歴史のみち」掲載 毎週金曜日 (～4/24)

4/25 海の京都・春季企画展「開け！丹後の宝箱」(～6/7) 開会行事(4/25)

5/16 文化財講座①
連続講座 これぞ丹後の宝、文化財
「成相寺参詣曼荼羅を読み解く」
講師：丹後郷土資料館 技師 吉野 健一

5/23 文化財講座②
連続講座 これぞ丹後の宝、文化財
「丹後の地宝」
講師：丹後郷土資料館 主査 森島 康雄

5/30 文化財講座③
連続講座 これぞ丹後の宝、文化財
「民具で見る丹後」
講師：丹後郷土資料館 資料課長 横出 洋二

6/6 古文書講習会
(6/27、7/18、8/29、9/12、10/31、11/21、12/12、3/12)
〔午前:実践編、午後:入門編〕

7/18 海の京都・夏季企画展「波濤を越えて船は往く－古代の丸木船から近世の弁才船まで－」(～9/6)

7/18 こども体験教室「夏休みに作ろう」
銭・鏡(7/23・30)〔午前:銭、午後:鏡〕

7/20 海の京都・高校生丹後文化フェスティバル

7/24 こども体験教室「夏休みに作ろう」
勾玉〔午前・午後〕

7/25 友の会つどい(総会)

7/25 文化財講座④
「船としての北前船」
講師：東京大学 名誉教授・

日本海事史学会 会長 安達 裕之 氏

8/8 こども体験教室「夏休みに作ろう」
勾玉〔午前〕 古代のヨロイ作り〔午後〕

8/22 こども体験教室「そばを作ろう」
(11/7・21、12/13)

10/10 海の京都・特別展「大海原に夢を求めて－丹後の廻船と北前船－」 (～11/29)
展示解説 10/10、11/7・28 各回10時～

10/17 友の会つどい(講演)

10/17 文化財講座⑤

「丹後廻船と由良川水運」

講師：元舞鶴市史編纂委員 真下 八雄 氏

10/28 友の会研修旅行「歴史が息づく古都・京都」

11/14 紙すき教室 (11/15・21・22・28、12/3・8)

11/14 海の京都シンポジウム

「大海原に夢を求めて」(宮津会館)

講師等：京都府立大学 准教授 藤本 仁文 氏

愛知大学 教授 印南 敏秀 氏

慶應義塾大学 教授 中西 聡 氏

丹後郷土資料館 技師 吉野 健一



11/28 文化財講座⑥

「由良船頭・加藤家文書の世界」

講師：丹後郷土資料館 技師 吉野健一

12/5 こども体験教室「和風を作ろう」 (12/19)

12/12 見て、触れて考古学 (1/9)

12/13 両丹地方史研究大会 会場 丹後郷土資料館

12/19 企画展「ふるさとミュージアムコレクション」
併設「守り育てようみんなの文化財展」(～2/7)

2/20 企画展「観光時代到来－近代天橋立観光－」
(～3/31)

2/27 文化財講座⑦

「近代天橋立観光と農村美術－知られざる宮津人形と橋立人形に迫る－」

講師：山城郷土資料館 主任 青江 智洋 氏

丹後郷土資料館調査だより 第 5 号

発行 2016年(平成28年) 3月25日

編集 京都府立丹後郷土資料館

〒629-2234 京都府宮津市字国分小字天王山611-1

TEL(0772)27-0230 FAX(0772)27-0020